

## イヴアン・ジャブロンカ『私にはいなかつた祖父母の歴史』 読書案内①

訳者・田所光男先生インタビュー

（訳者の名古屋大学人文学研究科・田所光男先生に、この本の特徴や魅力についてインタビュー形式でうかがいました。すこし読んでみたけれど、なんとなくとつつきにくい、そうした声も聞かれます。ではどうして、難しいと感じるのでしょうか？「読みにくさ」のワケについて、翻訳しながら先生が意識していたこと、感じたことなど、ざっくばらんに語っていただきました。本書をよりいつそうお楽しみいただくために、ご参考になれば幸いです。）

やつぱり、難しい？

田所 すなわち、もつと注釈をつけたほうがよかつたんじゃないのか、と言われました。さまざまな分野の手法が取り入れられて学際的な内容になっているし、言語いろいろなものが使われているから。読んでいくと、「あつ、ここは小説で……えーっと、あ、今度は歴史の叙述か！」みたいなところもあるようだ。

それから、もう一つ言われたのは、なぜポーランドでユダヤなのか、ということ。アウシュヴィツとかを知っている人にとっては、ポーランドの位置づけが理解できると思うんですが、そういうじやない人にとっては、なんで突然ポーランドなの？と、まずそこから疑問に感じるみたいで。ああ、そういうんだつたら、この本ゼッタイ売れないや、なんて（笑）

田所光男先生（以下、田所） この本を読んでくれた人たちが、コメントをぼくに送つてきているんですけど……その、やつぱり難しい！ って言つんですね。

——（笑）

## 冒頭のノリにくさ

——先生もおっしゃったように、とくに冒頭、いろいろな言語が入り交じっているところは、やはり翻訳もたいへん苦労されたのではないでしようか？

**田所** うんうんうん……そうですね。最初の部分、ポーランドのところは、ぼくもやりながら感じていたんですけど、やっぱりノリにくいんですよ。すごくノリにくくて……ルポルタージュ風であり、旅行記風であり。なにより、過去のことと現在のことと、すべて現在形で書かれているんですよ。

ちよつと文法の話になりますが、フランス語には過去形がいくつかあって、ふつう、書きことば、とくに歴史の本なんかでは「単純過去形」という形で記述されます。一方、話すことば、会話などで過去のことを語る場合は「複合過去形」を用いる、そういうふうに学校では習い

ます。

例外的に、臨場感を出すために、過去のことを語つているときでも、ある一部分だけ現在形を使うってことはあるんですけど、この本の場合は、過去と現在が、ぜんぶいっしょに現在形で書かれているんです。

——なるほど。たしかに、読みはじめたときちよつと違和感がありました。

**田所** でしょ、やっぱりそうでしょ？だから、そのままじゃ読者はぜんぜんわからないだろうと思つて、日本語にするときは過去形を交ぜるようにしたんです。といつても、ぜんぶ過去形にするのもそれはそれでまずいので、転換の場面に過去形をちよつと入れたり、その後はまた現在形を使つたり、いろいろ工夫しました。読んでくれた同僚は、これ、すごく大変だつたんじやないの？ って言つてくれて（笑）

——ほんとうにそうですね（笑）ややこしいですね。作品中、おなじ現在形で書かれていても複数の現在がある、

ということでしょうか。

**田所** ええ。書いている現在と、調査している現在、そ

して、調査されている一九XX年の現在が、すべて現在形で書かれているんですね。やつていくうちに、だんだんとジャブロンカ特有の使い方がわかつてきました。

——やはり、あえてそういうスタイルを選択しているんでしようか？

**田所** もちろん、あえてやっているんだと思いますね。ぼくは、ずっとフランス語をやつてきてはいますが、ほんとうのネイティヴではないので、妻（シルヴィイさん）に訊いてみたんです。すると、やっぱり上手だ、つて言うんですね。引き込まれる文体だと。ぼくは、逆に下手とは思わない？ ゼンぶ現在形なんだよ？ と言つたんですけど（笑）

日本語すべてをおなじようには再現できませんが、それでもやはり、ほんとうに魅力のあるところなんだと思いませんね。

——そのあたり、翻訳されるうえでどのように工夫されたんでしょうか。

**田所** すごく苦労しました。先ほども言つたように、日本語では現在形だけを続けてしまうと意味がわからなくなるので、転換の場面で過去形を入れ、また現在形の語りに戻す、というのが一つ。

それから、フランス語の表現に「自由間接話法」というのがあるんですけど、この作品中では、かなり曖昧なかたちで用いられていて……くわしい説明は省略しますが、最終的には、編集の方にもご協力いただいて訳出しました。すべてをシステムティックにやつてしまふのもよくないので。ジャブロンカつて、じつは作家で、小説も書いているんですね。そういうところもあつたから、原文にごまかされていないか、だまされてないか、ぼくが誤訳していないか、かなり集



中して取り組みました。

あとは、たとえば冒頭にシャガールが出てきますが、

日本語訳では、ここに注釈をつけることにしました。そうすることできメージがはつきりますし、逆に説明がないと、きっと日本の読者はなんにもわからないよね、と思つて。ただ、正直なところ、あんまり書いてしまわないほうがいいのかな、とも思つたんです。ほら、プルーストが、一つの文字や色や地名をひつかけて表現しますよね。それと似たような感覚で書かれているところなので、意味を限定せず、自由なイメージにゆだねてもよかつたかな、と。プルーストなんかを読み慣れていればピンとくるところかもしちゃませんが……

——ヒントがないと難しそうですね。

**田所** やっぱり最初の部分が、ジャブロンカのいちばん凝つているところ、なんですよね。いわゆる文学調といふか……。先へ進めば進むほどノリがよくなつて面白いので、最初の部分だけ見てパッと判断してしまつた人と、

最後まで読んだ人とは、ずいぶん印象が違つてくる

作品じゃないかと思います。

——最初はちょっと辛抱して、読んでいただきたいですね（笑）

無名の、非合法の人生

——前半部分で描かれている、共産主義活動のくだりも、人によつては読みにくい、というか、入り込めないな、と感じるようになりますが……いかがでしょうか？

**田所** とある右の先生が、性格のわからない本だ、と感想を送つてこられたんです。わたしは賛成しない、といふおつもりで書かれたのかもしれません。非合法の人生というのは、ふつうエスタブリッシュメントの側からすると、不愉快なものなのかもしれませんね。こいつらダメじゃん、っていうか。

結局共産主義は失敗したとか、ダメになつたとか、そんなふうに当時の人たちのことを行のコンテクストで読んでしまつたら、彼らはただのだまされたアホ、みたい

になつちやいますよね。でも、そうじやないんだ！ つてことを、ジャブロンカは盛んに言おうとしています。この社会はダメだ、新しい社会をつくるんだ！ と、彼らはその当時心から希望を抱いていたんだから。

じつはぼく、読書案内の関連図書に小林多喜二をあげようかと思つたんです。『党生活者』という本のなかで描かれている非合法の生活がよく似ているな、と思つて。だけど、あんまりそういうのばかりあげちゃうと完璧に左の人しか読まなくなつちやうんじやないかと思つてやめたんだけど（笑）

——（笑）

**田所** 『党生活者』に「季節々々さえ、党生活のなかの一部でしかなくなつた」という一節があります。ふつうだつたら、季節変化があるなかで人間の仕事があるわけだけど、多喜二に言わせれば、党生活という大きな枠組みがあつて、そのなかに季節すらも入つていいだけなんだと。それくらい、トータルな存在。

これつて、ジャブロンカのお祖父さん、お祖母さんの

世代にぴったりの言葉ですよね。親戚の何人かは、アルゼンチンへ移り住んで、今でも党員としての活動を続けている。最後まで、革命だ！ 革命だ！ って言つてるんですよ、年とつて、七、八〇歳になつても。ジャブロンカは彼らを落ち着かせようとするんだけど、革命やらないで何やるんだ！ って怒つている人たちがいる、そういう場面が途中に出てきますけど、それくらい本気で、じぶんたちの生活すべてがそこにあつた。そういうふうに生きていた人たちのことを、ジャブロンカは絶対に書きたかったんですよね。彼らの、ポジティブな、純粹な、すべてを賭して生きていた姿を書き記すこと。それがこの本の目的の一つだつたんだと思います。二〇世纪の全体主義のなか、ポーランドでも、フランスへ行っても、不法外国人として、ユダヤ人として、無名というだけではなくて、非合法な存在として生きた人たちの歴史。それですよね。

——そういう人たちの人生を、今わかつていい結果からファイルターをかけて見ずに……

**田所** そう、そういうことだと思います。歴史って、ある

るようで、じつはどこにもないわけだから。現在から見

たら、過去の彼らはもう、ただのだまされたアホな男た

ち、女たち、そうなるだけかもしれない。だけどそこに、

ほんとうの姿を見なくちゃいけない。そうすると、やつ

ぱり現在形、なんですよね。過去に身を置いて、過去の

現在に立ち会わなくちゃいけないんだから、それを単純

過去形で、かつて終わつてしまつたかのように書いたら

ダメなんです。だから、ジャブロンカの現在形にはすごく意味がある。

ジャブロンカ自身は「私」という言葉をよく強調していて、最初に橘さん（小会編集部長）とお話ししたときも、「私」ということについて考えてくださいね、と言われました。それは翻訳するなかでもずいぶん意識していました。でももう一つ、ジャブロンカもあんまり明言しないんだけど、現在の現在性、やっぱりこれだよね。すでに決まっているように見えちゃう世界の、もう一步奥にあるところ、そこへみずから入つていって、現在形で語ること。その現在の生成過程に立ち会つていくこと。

## 生成の行為

——その、いまおっしゃった「生成」という言葉に関連して……「生成の行為」というキーワードが、作品の冒頭に出てきます。「これは殺人捜査ではなく、生成の行為だ」と、本のオビにも使われていますが、うちの編集部から提案したものでしようか？

**田所** そうなんです。だからすごくいいセンス、と思つて。まさかここが抜かれるとは思いませんでした。ぼくなんかはどうちらかというと、ユダヤ的にも読めちゃう「正義」とか、そういう言葉に目がいつていきました。まさに今ここで、歴史をつくっていく、という、そういうことですよね。

——余談ですが、書店でこの本のご案内をしていると、けつこうこの言葉につっこまれました。セイセイノコウイツて何？ と（笑）なので、先生からもこの言葉について、すこしご説明いただけたらうれしいのですが。

ないでしょうか。

**田所** はい。歴史って、今という視点から、すでに定まつたものとして、つくられてしまつてあるじゃないですか。そうした枠をとり外して、そこに生まれつつある歴史を、現在形で書き記す。そういうことでしようか……やつぱり難しいですよね、これ（笑）

——「殺人捜査」という言葉はなんとなく想像がつくようなんですが、「生成の行為」というと、なんだか哲学的で、難しそうなことを言つてゐるな、と。

**田所** 殺人捜査というのは、殺人事件があつて、殺された人がいて、何が起きたかを調査していくわけですよね。そこでは、起こつたことは客観的な事実としてもう決まつちやつてる。一方で、生成の行為には、そんなのだれが決めたの？ ってところがあるんじやないかな。いまだ定まつていない、動いている事態があつて、そこに研究者が入つていく。研究者自身も動いている存在として、そのなかへ入つていく。そして、そこで立ち会う。動いている現場に、みずから立ち会う。そういうことじや

——歴史の生まれるところに、みずから立ち会う。この作品の理論編にあたるジャブロンカの『歴史は現代文学である』（小会より来年刊行予定）にもそのような言及があったように思います。……関連図書にもあげておられるが、以前、レヴィ＝ストロースに似た雰囲気を感じるとおっしゃっていたのは、このあたりの考え方でしょうか？

**田所** 近いと思うんですよね。レヴィ＝ストロースの著作にも「私」が出てくるし、人類学者の、研究ノートと呼んだらしいんでしようか、そういうた個人的なメモのようなものまで明らかにしてしまう。どこどこの資料に、こうこうこうすればアクセスすることができた、なんてことは、研究論文にはふつう書きませんよね？

——この本でも、ジャブロンカのお父さんが資料の閲覧に必要な身分証明書を忘れてしまつて……そんな一幕が描かれていましたよね。

**田所** そうそう。カードを忘れちやつたとか、そんなことまで書いてますよね。調査がどんなふうに進んでいる

かを明らかにすること、そのことの面白さもありますが、その調査自体もまた生成の行為である、そういうことじやないでしようか。歴史が書かれるとき、調査もまた歴史を生み出している。だからこそ、その調査も現在形で語られる。

あと、お祖父さんたちが刑務所のなかでハンガーストライキをやつたり、食事や待遇に不満の声をあげたりすることなんかも、歴史の一つとして描いてます。そんな、犯罪者とされる集団がやつしたことなんて、公的な、大文字の歴史とはまったく関係のないことですね。だけど、そんな場面にも立ち会っている。歴史の方たちは、これを読んでどう考えるんでしょう？ そんなこと、ありふれた、ふつうすぎる出来事だよ、と思うんでしようか。そう言わてしまつたら、そのとおりかもしれませんが……

## フランス文学を選んでよかつた

**田所** 作品の後半で、ドランシー（パリ郊外の町、ユダヤ人はここからアウシュヴィツへと移送された）からお祖母さんがじぶんの子どもに宛てて書く、小さな手紙が出てきますよね。そんなような一つの小っちゃな事象を、どのようにして、その時代や、社会や、政治関係と結びつけて考えていくか。これは、関連図書にサイードをあげてもいますが、ぼくが長いことやつてきた比較文学の基本的な考え方でもあるんですよね。テクストの連関性、テクストの平等性と言つたらいいんでしようか。偉大な文学作品じやなくとも、走り書きのような文章でも、おなじように並べることができる。よく言われることですが、純文学もエロ小説も一緒に扱うことができる。

——お祖母さんの手紙はとても感動的でした。すごく印象に残っています。

**田所** いちばんいいシーンですよね。じつはね、翻訳し

ながら、読みながら、ずっと泣いてたんです。ジャブロンカも「私はふだん決して読まない」と書いていますよね。だってこれは、ほんとうにじぶんのお祖母さんが書いたもので、そしてお祖母さんはこの後、ほんとうにいなくなつてしまつたわけだから。

ジャブロンカ本人にも伝えたんです。ぼくはフランス文学を選んでよかつた、このテクストに出会えてよかつた、と。ふだん、文学とか思想とか、いろんなジャンルのものを読んでいますが、これこそがフランスの、奥の奥の奥にあるテクストですよね。ほんとうにシンプルなフランス語なんだけれど……だからこそぼくは、どうしたつてこれを伝えたくて、訳しました。その気持ちが伝わつたようで、うれしく思います。

——ぜひ、ここまで読み進めてもらいたいですね（笑）

**田所** そうですね（笑）関連図書にもあげているように、アウシュヴィッツについてはいろいろな本が出ていますし、ゾンダーコマンド（ユダヤ人強制収容者で組織され、死体処理を担当させられた「特別作業班」）なんかにつ

いてはいろんなことが言われていますが、このテクストの、この部分ですよね。ぜひ読んでほしいと思います。

（インタビュー・名古屋大学出版会 営業部）

（訳者紹介……田所光男先生。一九五六年、東京都に生まれる。一九八五年、東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程中途退学。現在、名古屋大学人文学研究科教授。専門は、比較文学、比較文化、ユダヤ研究。共著書に、『異文化への視線』（名古屋大学出版会、一九九六年）、『講座 小泉八雲II ハーレンの文学世界』（新曜社、二〇〇九年）など。）

